

げん じつ 幻日 原城攻防絵図

長崎新聞紙上で連載開始

「幻日 原城攻防絵図」の連載が、長崎新聞でスタートします。ふるさと南島原を舞台に描かれるこの作品が、歴史が好きな人にとって垂涎の作品となることは間違いありませんが、それだけではありません。作者は巨匠「市川森一」氏。数々の名作を生み出した市川氏の手腕に、「島原の乱のことをよく知らない」という人も、存分に楽しめる作品となりそうです。今月は、連載にさきがけて、市川氏と松島市長が対談。有馬の歴史を愛する二人が、原城の魅力、島原の乱の壮大さを語りました。

物語のあらすじ
寛永14年の冬、原城の廃墟に5人の有馬家の遺臣たちが籠城の下見に訪れた。かつてセミナリヨの学生だった彼らは、キリシタン文化華やかだった有馬の黄金時代の再現を夢見て、万に一つの勝ち目もない幕府軍との戦いに臨む。かたや、巨大な幻想の怪物と化した原城の一揆軍に挑む松平伊豆守信綱・輝綱父子や板倉重昌・重矩父子の苦悩と葛藤の日々。虚構（キリシタン軍）と現実（幕府軍）の壮絶な死闘の果てに出現する幻想の太陽―幻日が語りかけてくるものは…。謎の天人、天草四郎の出生の秘密を新資料で解き明かす驚愕の大団円へ！
「島原の乱」が幕を開ける！

二〇一〇年一月

長崎県民が

南島原市を

注目する

市川森一

作家・脚本家



南島原市長

松島世佳

市長／今回「幻日」という、原城を舞台にした小説を執筆いただくこととなり、ありがとうございます。さっそくですが、この「幻日」というタイトルの意味を教えてください。

「幻日」とは、まぼろしの「太陽」

市川／幻日とは、長崎で時々見られる太陽が二つに見える大気現象のことです。当然本物の太陽は一つですから、もう一つは、幻、ということになります。島原の乱の死者は3万7千人と言われています。圧政に苦しみ、宗教弾圧を受ける民衆の毎日、漆黒の闇であったに違いありません。そんな彼らにとって、キリシタンの教えは窓の隙間から「か細く」差し込む「太陽」ではなかったか。その一方で、それは本当に救いの光だったのか。ということに思いを馳せたとき、「幻日」という言葉が浮かんできたのです。

また、島原の乱は、原城のみならず、天草から島原までの広範囲で壮大な歴史ですが、サブタイトル「原城攻防絵図」の名前どおり、できるだけ原城に舞台を絞って描きたいと考えています。

親子の関わり合いを描きたい

市長／どんな人たちを中心に描く予定ですか。

市川／島原の乱を描く場合、天草四郎を中心に描くことが多いのですが、今回は、天草四郎に加え、セミナリヨ出身の5人を中心に描く予定です。特に取材を通して面白い、と感じたのは、親子関係です。例えば松平伊豆守と息子輝綱親子や、他の参陣した諸大名の親子関係が面白い。武功をあげさせたい親、それにこたえられない子。戦乱を生きた父と、泰平の世しか知らない息子世代の対比などは現代にも通じる設定ではないかと思っています。

また、出島でさらし首となった松島源之丞は、ローマに渡った千々石ミゲルらと同年代でした。セミナリヨでミゲルらと机を並べた彼も、きっとローマへ行きたいと願ったに違いありません。しかしかなわなかった。

市長／なぜでしょうか？

市川／彼は家老の息子だったから。当時は、ローマへ行き、無事に帰りつくことが、途方もなく難しかった時代です。彼が望んでも周囲がそれを許さなかった。

市長／相いれない「組織社会」と「若者の夢」の交錯。現代にも通じるテーマですね。

市川／ところで市長も「松島」ですが、市長は「松島源之丞」の子孫ではないのですか？（笑）

市長／私は、父から四国の方から移住してきました。こちらに来て13代目。と聞かされていましたが。（次頁）